

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文))				
(著書(和文)) 1. 『音楽教育の研究 - 理論と実践の統一を めざして-』 2. 『五線譜の約束』 3. 『Mosquito Etude No.1 inC-flat Minor』 4. 『Fly Etude No.4 inB-MinorDokeshi EtudeNo.3 inB- Major』	共著 共著 単著 単著	1999年9月 2006年1月 (第1刷) 2011年2月 2012年2月	音楽之友社 明星出版 ふくろう出版 ふくろう出版	総ページ数：605ページ 担当：第9章「日本音楽のコブシの美学」 (13ページ, pp.521 - 533) 日本音楽の歌の中のコブシ(小節)に着目し、歴史的変遷を追いながら分析を行っている。そしてこれが、日本人が歌うという行為において重要である事を明確に示し、音楽教育の歌唱指導や日本音楽の旋律の捉え方に新しい示唆を与えている。 監修：浜野政雄 共著者：今川恭子、大畑祥子、小川昌文 小原伸一、小山真紀、加藤富美子、権藤敦子、佐野靖、坪能由紀子、深見友紀子、本多佐保美、宮野モモ子、村尾 総ページ数：106ページ 担当：第4章、第8章(1・2・3・5) 第10章コラム6 (24ページ, pp.23 - 33, pp.65 - 67, p71, pp.81 - 90) 保育士・幼稚園教諭・小学校の教員などの職業に就くために勉強している人を対象とした基礎音楽理論である。練習問題も含まれており、最終的にはコードネームを見て伴奏づけが出来るようになる事を目的としている。 共著者：阪井声、小山真紀、木暮田 総ページ数：10ページ (10ページ, pp.2 - 11) 教育現場で必要となる、より発展的な音楽表現技術を習得するために、表現力や指の運び方の練習教材曲として作られた楽曲である。 総ページ数：11ページ (11ページ, pp.2 - 12) ピアノ奏法、弾き歌い等実技演習を通して、教育現場で必要となる、より発展的な音楽表現技術を習得するために、表現力や指の運び方の練習教材曲として作られた楽曲である。

5. 『新版 小学校音楽科教育法』	共著	2018年3月	教育出版	<p>総ページ数：199ページ 担当：IV基礎資料 4. 楽典, 5. 弾き歌い (7ページ, pp. 182 - 186, pp. 187 - 188) 平成29年3月、新しい学習指導要領が告示された。本書は新学習指導要領の改訂の趣旨をふまえ、今後の小学校音楽科教育の在り方を見据え編纂したものである。音楽の基礎知識としての楽典および弾き歌いを担当している。</p>
(学術論文(欧文))				
<p>(学術論文(和文))</p> <p>1. 「日本音楽におけるこぶしの美学と実態」(修士論文)</p> <p>2. 「日本音楽の指導に関する研究」(研究生論文)</p> <p>3. 「特集・新しい音楽授業研究へのアプローチ2」</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>1994年3月</p> <p>1996年3月</p> <p>1997年10月</p>	<p>千葉大学大学院 教育学研究科 修士論文</p> <p>東京藝術大学大学院 音楽研究科 音楽教育専攻 研究生論文</p> <p>「音楽教育研究 ジャーナル第8号」 東京藝術大学 音楽学部 pp. 13 - 21</p>	<p>日本の大衆歌謡の中から本質的な音楽的要素を認識することができれば、日本独自の音楽文化を育む幼児の音楽教材論として、発展的可能性を有すると考え、日本人の本質的要素の一つとして、日本音楽のこぶしに着目した研究である。具体的には、南都声明のこぶしの分類を基礎として、民謡と演歌への変遷を探っている。結果、大衆歌謡の一つである現代の演歌には、日本人の最も必要とされるものが凝縮されていることが明らかとなり、日本人の音楽文化を育むための結果を踏まえ、演歌歌手や歌謡曲の作曲家の取材を通して、演歌の装飾的旋律を活用した、授業モデル(歌唱領域)を提案したものである。小学校における中高学年を対象としており「越天楽今様」の歌唱実践を取り上げている。児童が視覚的に理解できるよう、工夫をこらした活動を用いた授業モデルである。今後の課題として、このモデルを基に実践し、どのような問題が新たに生じるのかを明らかにする。担当：「日本の音との出会い(3授業分析の試み)」 (9ページ, pp. 13 - 21) 小学校6年生の授業実践(授業者 国立市立国立第二小学校教諭 山内雅子)の授業分析を行い、新たな分析方法を示したものである。子どもと教師がどう関わっていくか、音、映像、子どもの動きを、時空的な連続性を持って記述する分析図表を提示している。 共著者：今川恭子、小山真紀、阪井幸、佐野靖、石川成、中野吉子</p>

4. 「声の魅力を探る - 音声生理学からのアプローチ -」	共著	1998年4月	「音楽教育研究 ジャーナル第9号」 東京藝術大学 音楽学部 pp. 36 - 43	担当：「音声生理学からのアプローチ」 (8ページ, pp. 36 - 43) 音楽教育における発声に関する用語（頭声発声、地声など）は多くの誤解や混同を招いている。そこでここでは、あらゆる文献とつき合わせて用語の整理を行い、音声生理学的な根拠を明らかにしようと試みているものである。
5. 「もうひとつの日本のうたの歌い方」	共著	1999年4月	「音楽教育学第28 - 3号」 日本音楽教育学会 pp. 13 - 18	担当：「日本のうたの流れに着目して」 (6ページ, pp. 13 - 18) 日本の音楽の歌い方には雅楽系、声明系があるという。このうち現行の音楽の教科書には、雅楽系の歌い方に重きが置かれていると思われる。この2つの歌い方の系譜を辿り、教科書には触れられないもう一つの歌い方に着目して述べている。平成10年・第29回大会・日本音楽教育学会発表をもとにまとめあげたものである。
6. 「演歌・民謡における発声、歌い方の指導と学習」	単著	1999年9月	「音楽教育学第29 - 2号」 日本音楽教育学会 pp. 1 - 12	(12ページ, pp. 1 - 12) 小学校学習指導要領では（平成10年告示）、発声指導が「頭声的発声」から「自然で無理のない声」に変わった。これを踏まえ、日本音楽の教材を歌う場合は、具体的にどのような発声が求められるのか、といった問題意識のもと、民間音楽教育におけるコブシ・ユリの指導事例に着眼し、自ら民間における演歌、民謡教室に入門することで、ここでの体験を基にした具体的な学習方法を提示している。その上で、学校音楽における日本音楽の歌唱法の在り方に
7. 「国民学校芸能科音楽の研究Ⅱ」	共著	2001年10月	「音楽教育研究 ジャーナル第16号」 東京藝術大学 音楽学部 pp. 29 - 53	担当：「国民学校芸能科音楽の研究Ⅱ」 (25ページ, pp. 29 - 53) 国民学校研究会の一員として戦前期の国民学校の音楽教育の歴史を、従来の文献資料に加え、当時の子ども、教師へのアンケート、インタビュー調査を行う事を通して、教育制度と実態を明らかにしたものである。
8. 「国民学校芸能科音楽の研究Ⅲ」	共著	2002年10月	「音楽教育研究 ジャーナル第18号」 東京藝術大学 音楽学部 pp. 14 - 17	共著者：幸山良子、国府華子、中甲 担当：「昭和29年度初等科第1学年の1年間」 (4ページ, pp. 14 - 17) 長野県の高遠国民学校をフィールドとして調査研究を行っている。具体的には、当時の子どもたちや教師インタビュー調査を基に、伊那市立高遠小学校の職員資料室に保存されている資料を解読し、分析を行っている。

9. 「誠之国民学校における音楽授業の諸相」	共著	2003年12月	「音楽教育学第33 - 2号」 日本音楽教育学会 pp. 1 - 8	担当：「学校所蔵文書とアンケート調査にもとづく実践史の試み」 (8ページ, pp. 1 - 8) 誠之国民学校を一つの事例として、国民学校期の音楽教育実践の実相について明らかにすることを目的としたものである。学校所蔵文書とアンケート調査に基づく実践史の試みである。
10. 「J・ポップスの装飾的旋律の歌い方」	単著	2007年8月	「日本音楽教育実践ジャーナル」 vol. 5 no. 1 通巻9号 日本音楽教育学会 pp. 32 - 39	日本音楽を取り上げた音楽学習では、鑑賞学習に留まることが多く、実際に声を出して歌う段階にまで及んでいない。これらの問題意識のもと、ここでは、現代の児童生徒に親しまれているJ・ポップスを取り上げ、そこでの装飾的旋律を日本古来の伝統音楽のものと比較し、分析することで、伝統音楽をより身近に感じ、興味関心が育つような授業論の在り方を模索している。そして、音楽科教育における歌唱の在り方や指
11. 「日本の伝統的な音楽の鑑賞学習に関する一考察」	共著	2010年3月	「平成21年度 全日本音楽教育研究会大学部会 会誌」 全日本音楽教育研究会大学部会 pp. 23 - 25	日本の伝統的な音楽の鑑賞学習として、子どもたちに最も身近であるJ・ポップス教材を導入し、能の謡との比較を通して新たな授業論の展開を試みたものである。J・ポップスと能の謡には、非常に似た要素が多く見ることができ、音楽科教育における伝統音楽の鑑賞領域のみならず、伝統的な歌唱の充実を目指した授業論の在り方にも、今後大いに期待できるものであることがわかつた
12. 「カヴァー曲における装飾的旋律の一考察」	単著	2011年3月	「平成22年度 全日本音楽教育研究会大学部会 会誌」 全日本音楽教育研究会大学部会 pp. 31 - 40	子どもたちに身近なJポップの歌い方を取り上げ、伝統的な歌い方と現代の歌い方の共通点や相違点を明らかにすることで、伝統音楽をより身近に感じ、興味関心が育つような授業論の在り方を模索している。音楽科教育における伝統的な歌唱の充実を目指した授業論の在り方に、新たな
13. 「日本民謡の特徴を生かした歌唱学習についての一考察 - コブシを用いた実践の分析を通して -」	単著	2013年3月	「群馬大学教科教育研究12号」 群馬大学 教科教育研究会 pp. 27 - 34	(8ページ, pp. 27 - 34) 日本民謡におけるコブシの歌いまわしに着眼し、子ども自らが日本民謡の歌い方に興味関心を持ち、体験できるような学習方法を追究している。そして、日本民謡の特徴を生かした歌唱学習の問題点と課題を検討し、音楽科教育における曲種に応じた発声の在り方に、何らかの示唆を
14. 「音楽科教育における日本音楽理解の一考察 - 日本民謡「南部牛追い唄」の歌唱分析を通して -」	単著	2014年3月	「群馬大学教科教育研究13号」 群馬大学 教科教育研究会 pp. 29 - 40	(12ページ, pp. 29 - 40) 無拍のリズムを有する民謡の旋律構造を理解するために、5人の民謡歌手が歌う「南部牛追い唄」を基に、小泉文夫による「追分様式の各フレーズの三要素の配合」に関する理論に依拠し、旋律的構造分析を行った。結果、追分様式の民謡のリズムを規定している要素に当てはまるものとして捉えられ、装飾的な旋律を

15. 「伝統的な声の特徴を生かした歌唱学習の試み」	単著	2014年3月	「平成25年度全日本音楽教育研究会大学部会 会誌」全日本音楽教育研究会大学部会 pp. 21 - 26	(6ページ, pp. 21 - 26) 日本民謡を取り上げた歌唱学習には、次の2つの問題点があると考えている。1つめは技術的側面での問題。2つめは心理的側面での問題。日本の伝統的要素を用い特徴を生かして歌うことが、現代の子どもたちにとって未知の世界であるために、違和感や恥ずかしさから、声を出すことに至らない点が挙げられる。本稿ではこれらの問題解決の一方法として、日本の伝統的な声の特徴を生かした歌唱学習の新たな試みを述べている。具体的には、実際に日本民謡を歌う導入段階として、J-POPを活
16. 「歌唱教材におけるJポップの在り方 - 現代の若者の歌い方から探る - 」	単著	2015年3月	「群馬大学教科教育研究14号」群馬大学教科教育研究会 pp. 21 - 30	(10ページ, pp. 21 - 30) 今やポピュラー音楽は子どもたちにとって最も身近な存在であると言っても過言ではない。このようなことから、近年、Jポップも歌唱教材として教育現場において多く用いられるようになった。しかし、その歌い方については、他のジャンルにおける歌唱教材と同様に「曲種に応じた」歌い方が確立されていないのが現状である。このようなことからここでは、ポピュラー音楽教材の存在意義や歌唱法の在り方に、新たな視
17. 「歌唱教材におけるJポップの在り方 - 大学生の歌い方の実践記録から - 」	単著	2016年3月	「群馬大学教科教育研究15号」群馬大学教科教育研究会 pp. 29 - 37	(9ページ, pp. 29 - 37) 「歌唱教材におけるJポップの在り方 - 現代の若者の歌い方から探る - 」(平成27年3月)の継続的研究である。ここでは、教育学部音楽専攻の学生を対象とし、現代の若者の歌い方を分析したものである。将来、我が国の音楽教育を担うであろう教育学部音楽専攻生のJポップの歌い方や意識を探ることも、Jポップ教材の在り方を考察する上で無視できない部分と考えたからである。また、音楽
18. 「教材としてのJ-POPの可能性 - 歌詞分析を通して - 」	共著	2017年3月	「群馬大学教科教育研究16号」群馬大学教科教育研究会 pp. 95 - 107	(13ページ, pp. 95 - 107) 今日の音楽科教育では様々なJポップ教材が取り入れられ、今やJポップは音楽の一ジャンルとして地位を確立している。では、Jポップ教材を用いた場合、そこから何を学ぶべきか。本稿では、現代の子どもたちが最近よく聞く音楽についてのアンケートを基にして選定されたJポップの歌詞の比較を通して、そこでの教材の選択の観点や教材の位置づけを明確化し、「Jポップでしか学べないもの」を明らかにしたものであ

19. 「J・ポップの歌い方から学ぶ我が国の音楽 - 奄美大島出身の歌手に着目して -」	単著	2017年3月	「群馬大学教科教育研究16号」 群馬大学 教科教育研究会 pp. 85 - 94	(10ページ, pp. 85 - 94) 沖縄や奄美大島の歴史的、郷土的背景を含む民謡に重きを置いた音楽的研究は数多く見られるものの、これらの独特的歌唱技法が、どのような意味を持つのか、といった、本質的な問題の所在を明らかにし、音楽科教育における教材論や授業論にまで具体化した研究は数少ない。そこで、本稿では奄美大島出身の歌唱スタイル(グイン)に着目し、歌唱分析を行っている。そして、子どもの身近な音楽であるJ・ポップ音楽を切り口として、普段聴き馴れない民族的な響きに慣れ親しむきっかけと
20. 「歌唱指導に関する一考察 - アフォーダンス理論を手がかりに -」	単著	2018年3月	「群馬大学教科教育研究17号」 群馬大学 教科教育研究会 pp. 63 - 72	(10ページ, pp. 63 - 72) 子どもの音楽表現活動における歌唱活動について、「歌わせる」活動ではなく「歌う」活動の実践に向けて、アフォーダンス理論を手掛かりに考察した。行為的・道具的アフォーダンスの4つのフェーズにあてはめることによって、子どもの生活との文脈の繋がりを深めた強烈な目的意識と、その継続的な高まりが
21. 「カンボジアにおける音楽教育の現状と課題」	共著	2019年3月	「群馬大学教科教育研究18号」 群馬大学 教科教育研究会 pp. 19 - 30	(12ページ, pp. 19 - 30) 筆者が行っているカンボジア情操教育の支援活動を踏まえ、カンボジアの学校教育における音楽教育の現状と課題を明らかにしたものである。具体的には、カンボジアの子どもの情操教育に携わっている、日本人現職教員のインタビューを行い、筆者らの行ってきた活動と照らし合わせながら、カンボジアの子どもの情操教育の現状を明らかにし、課題を導き出している。結果、現状では西洋音楽中心の教育が成されていることが明らかとなった。文化の中で育まれてきた自国の「わらべうた」や「遊び歌」に重きを置いた音楽教育
22. 「文化の中で育まれた子どもの歌の役割と音楽教育 - カンボジアの子どもの音楽活動から幼小連携を探る -」	単著	2020年3月	「群馬大学教科教育研究19号」 群馬大学 教科教育研究会 pp. 1 - 8	「8ページ, pp. 1 - 8」 「カンボジアにおける音楽教育の現状と課題」(前掲)の継続的研究である。幼小連携の視座に立ち、子どもの音楽教育や、更には小学校教員養成学校における音楽教育の在り方として、文化の中で育まれた子どもの歌である自国の「わらべうた」「遊び歌」の役割や重要性について述べている。発展途上国における子どもの情操教育の現状と課題を見ていくことで、日本が忘れかけている
23. 「子どもの音楽教育におけるわらべうたの重要性 - カンボジアの遊び歌から見る -」	共著	2021年3月	「群馬大学教科教育研究20号」 群馬大学 教科教育研究会 pp. 25 - 31	「カンボジアにおける音楽教育の現状と課題」(前掲)の継続的研究である。ここでは、幼小連携の視座に立ちながら、カンボジア人が無意識にもつ音楽的感覚を尊重し、その感性に寄り添った教材はいかなるものかを模索している。その方法として、ここでは文化の中で育まれた遊び歌の収集と分析を行っている。

<p>24. 領域「表現」におけるわらべうたの重要性 - 子どもの感性を育むための遊びから質の違う遊びへ -</p>	<p>共著</p>	<p>2022年3月</p>	<p>「群馬大学教科教育研究21号」群馬大学教科教育研究会pp. 11 - 20</p>	<p>領域「表現」における表現活動としてのわらべうた遊びについて、デューイのオキュペーション概念を手掛かりとして、幼児期における「遊び」の在り方を検討した。幼児期においてわらべうた遊びに没頭することを「経験」として捉え、経験の質を変えていくことで、音楽的諸要素を自覚・感受する土台づくりに繋がることがわかった。また、学びの芽生えを促すことを強く意識した指導者の援助が重要であることを示した。</p>
<p>(紀要論文)</p> <p>1. 「日本の音楽における装飾的旋律の一考察」</p> <p>2. 「演歌から音楽科教育における伝統的な歌い方を学ぶ - 演歌歌手の歌唱分析とインタビューを通して -」</p> <p>3. 「主体的な表現を引き出すための授業実践の試み - アフォーダンス理論を援用して -」</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>共著</p>	<p>2003年9月</p> <p>2014年2月</p> <p>2020年2月</p>	<p>「宇都宮短期大学紀要論文第10号」宇都宮短期大学音楽科 pp. 127 - 143</p> <p>「群馬大学教育学部紀要芸術・技術・体育・生活科学49巻」群馬大学教育学部紀要 pp. 17 - 31</p> <p>「群馬大学教育学部紀要芸術・技術・体育・生活科学編第55巻」群馬大学教育学部紀要 pp. 1 - 10</p>	<p>(17ページ, pp. 127 - 143) 今日の音楽科教育では、自国の音楽を積極的に取り入れるようになった。しかし一方では、日本の音楽の微妙な揺れなどから、声に出す段階にまで至らない、という現状は否めない。この原因の一つには、日本人が歌うという本質論的問題の所在を突き止め、その解決策を具体化し展望するという点の欠如が考えられる。こうした問題意識のもと、ここでは、日本人が歌うことによって無意識に何が表出し、そこにはどのような意味が隠されているのかを、音楽科教育の立場から具体的に示すことで、日本音楽を取り扱った歌唱学</p> <p>(15ページ, pp. 17 - 31) 我が国や郷土の伝統音楽の学習の充実化に焦点を置き、筆者が従来より行っている日本音楽の歌唱における、旋律の捉え方に関する考察結果を踏まえ、日本人の歌い方を明らかにすると同時に、音楽科教育における日本音楽の歌唱法の在り方、旋律の捉え方に何らかの示唆を与えることを目的としたものである。具体的には、筆者が今まで分析を行ってきたコブシの機能や性質の見解をもとに、歌い手側の意識を照らし合わせる</p> <p>(10ページ, pp. 1 - 10) 主体的な表現を引き出すための環境設定を取り入れた音楽活動を、アフォーダンス概念の視点から提案した。固定観念や制約のない環境の設定、他者との関りをもつためのグループ活動の重要性が確認できた。目的意識を持ち続けたまま、マイクロスリップを繰り返す先に、主体的な表現が引き出されることがわかった。特に他者との関りによって、主体的に身体の動きや表現が誘発され、試行錯誤が促されることが明らか</p>

<p>(辞書・翻訳書等)</p> <p>1. 『音楽教育学大綱 S・アーベル・シュ トルート』</p>	<p>共著</p>	<p>2004年1月</p>	<p>音楽之友社</p>	<p>総ページ数：786ページ 担当：第7章「音楽教育の為の機関」 (10ページ, pp. 526 - 535) ドイツの音楽教育学研究者S・アー ベル・シュトルートによって集約 された学問体系を訳しているもので ある。音楽学習、音楽指導、音楽授 業の諸問題を学問的に基礎づけてお り、ドイツ音楽教育学研究の集大成 である。英米音楽教育学とはひと味 違う学問体系となっており、日本の モデルとなるものである。 監修：山本文茂 共著者：江崎公 子、加藤富美子、久納慶一、小泉恭 子、阪井恵、笹野恵理子、佐藤望、 佐野靖、志民一成、高橋雅子、坪能</p>
<p>(報告書・会報等)</p> <p>1. 「授業研究報告書」</p> <p>2. 「音楽教育史研究に おける制度・教師・ 学習者の関係性の探 求」</p> <p>3. 雑誌「別冊宝島 音 楽誌が書かないJ ポップ批評57」</p> <p>4. 雑誌「別冊宝島 音 楽誌が書かないJ ポップ批評58」</p>	<p>単著</p> <p>共著</p>	<p>2000年 9月</p> <p>2004年3月</p> <p>2009年1月</p> <p>2009年3月</p>	<p>「音楽教育学第29 - 3号」 日本音楽教育学会 p. 64</p> <p>平成13～15年度科学 研究費補助金研究成 果報告書 pp. 26 - 28 pp. 31 - 32 pp. 57 - 58</p> <p>別冊宝島1588 pp. 58 - 59</p> <p>別冊宝島1898 pp. 68 - 69</p>	<p>(1ページ, p. 64) 1999年第30回大会音楽教育学会（東 京藝術大学）において、台東区立上 野中学校第1学年（授業者斉藤撰） の授業研究が行われた。その授業研 究記録として子どもの動き、表情、 音、会話など、子どもと教師の関わ りについて記録し、合唱指導のなか で担当：「第1節 歌唱指導」 (7ページ, pp. 26 - 28, pp. 31 - 32, pp. 57 - 58) 音楽教育史における制度、教師、学 習者の3観点からの関係性を探求し たものである。平成13年からの継続 研究である。ここでは、国民学校時 代の音楽教育体験者の聞き取り調査 に基づいた研究成果を述べている。 当時の教育制度と学校音楽が子ども たちにどのような意味をもって学ば れ、受容されたのかを明らかにする 事を目的としたものである。国民学 校期における芸能科音楽の歴史的研 究である。 共著者：本多佐保美、佐野靖 西島 央、今川恭子、勝谷祥子 国府華 子 (2ページ, pp. 58 - 59) コブクロの黒田俊介の歌唱力は定評 がある。力強く大きな声で音程もよ いと思われるが、それだけではなく、 彼の歌はもう一つ「声の揺れ」 という要素がある。筆者の専門を基 に、黒田の歌い方を、読者に分かり やすく述べている。 (2ページ, pp. 68 - 69) ポルノグラフィティ岡野昭仁の歌い方 を読者に分かりやすく述べている。 彼の歌い方の特徴的な声に加え歌唱 方法も極めてと独特である。「しゃ くり上げ」に特徴が見られる桑田佳 祐と比較しつつ述べている。</p>

5. 雑誌「別冊宝島 音楽誌が書かないJ ポップ批評59」		2009年4月	別冊宝島1623 p. 71	(1ページ, p. 71) スマップの中居といえば歌があまり得意ではない、と本人もネタにする程である。なぜ、彼の歌はあまり上手く聞こえないのか。どのようなケースであれば上手く聞こえてくるのか。こういった点に着眼して、彼の歌い方を読者にわかりやすく述べ(1ページ, p. 52)
6. 雑誌「別冊宝島 音楽誌が書かないJ ポップ批評60」		2009年6月	別冊宝島1637 p. 52	アルフィーと言えば三者三様のキャラクターがある。歌い方はどうであろうか。三者のそれぞれの特徴的要素に着目して、読者に分かりやすく述べている。(7ページ, pp. 77 - 83)
7. 「あなたにとって大学とは?本音でトーク」	共著	2010年1月	「日本福祉大学子ども発達論文集 第2号」 日本福祉大学子ども発達学論集 pp. 77 - 83	2年間にわたり、子ども発達学部保育専修及び初等専修においてのフォーラム「あなたにとって大学とは?本音でトーク」を開催し、学生が大学に求めるものを、教員と学生とのKJ法を通して明らかにしている。結果、保育園や幼稚園教諭を目指す者と、小学校教員を目指す者との大学に対する意識の違いが浮き彫りとなる。(6ページ, pp. 145 - 150)
8. 「あなたにとって大学とは?本音でトーク第2弾」	共著	2011年1月	「日本福祉大学子ども発達論文集 第3号」 日本福祉大学子ども発達学論集 pp. 145 - 150	2年間にわたり、子ども発達学部保育専修及び初等専修においてのフォーラム「あなたにとって大学とは?本音でトーク」を開催し、学生が大学に求めるものを、教員と学生とのKJ法を通して明らかにしている。第2弾である。結果、第2弾では、教員側と学生たち側との、大学に求める意識の違いが明らかとなった。(1ページ, p. 14)
9. 「群馬大学附属小学校公開研究会に参加して」	単著	2014年3月	「平成25年度 群馬大学教育学部教員養成FDセンター推進プロジェクト報告書」 群馬大学教育学部教員養成FDセンター運営委員会 p. 14	群馬大学附属小学校の公開研究会に、研究協力者という立場で参加し、その内容を述べている。自ら考え表現し、学びを深める子どもの育成、及び学び合いにおける指導の工夫とはいかなるものかを、実践を通して明らかにしようとしたものである。平成24年10月～28年3月まで、附属小学校の研究協力者として、附属小学校立派な教員を育てるワンポイントアドバイスとして書かれたものである。教科教育Q&A「教材として民謡を取り上げたいけど、鑑賞のみに終止してしまい、実際にどのように教えたらいかがわからない」という小学校学級担任からの質問に答えたものである。具体的な指導の方法をステップ1～ステップ6として段階的にわかりやすく述べている
10. 「はじめての民謡授業」	単著	2015年3月	「群馬大学教育実践年報第4号 2014年」 附属学校教育臨床総合センター pp. 42 - 43	
(国際学会発表)				

<p>(国内学会発表)</p> <p>1. 「音楽教育における日本音楽の指導の在り方」</p> <p>2. 「もう一つの日本の歌の歌い方」</p> <p>3. 「音楽教育史研究の再検討(2)」</p> <p>4. 「音楽教育史研究の再検討(3)」</p> <p>5. 「J・ポップスにみられる装飾的旋律の一考察」</p> <p>6. 「J・ポップスにみられる装飾的旋律の一考察」</p> <p>7. 「日本の音楽における装飾的旋律の一考察」</p> <p>8. 「日本の伝統的な音楽の鑑賞学習に関する一考察」</p> <p>9. 「カバー曲における装飾的旋律の一考察」</p>	<p>1996年10月</p> <p>1998年9月</p> <p>2001年12月</p> <p>2002年11月</p> <p>2004年11月</p> <p>2006年10月</p> <p>2009年10月</p> <p>2009年11月</p> <p>2010年10月</p>	<p>第27回大会 日本音楽教育学会 開催地： 金沢大学</p> <p>第29回大会 日本音楽教育学会 開催地： エリザベト音楽大学</p> <p>第32回大会 日本音楽教育学会 開催地： 東京芸術大学</p> <p>第33回大会 日本音楽教育学会 開催地： 金城女学院大学</p> <p>第35回大会 日本音楽教育学会 開催地： 武蔵野音楽大学</p> <p>第37回大会 日本音楽教育学会 開催地： 千葉大学</p> <p>第40回大会 日本音楽教育学会 開催地： 広島大学</p> <p>全日本音楽教育研究会全国大会 開催地： 武蔵野音楽大学</p> <p>全日本音楽教育研究会全国大会 開催地： 東京芸術大学</p>	<p>今日の音楽教育における日本音楽の位置は確実に定着している。しかし一方では、日本音楽の微妙な音程の揺れに対する自覚が希薄である為か、声を出す段階にまで至らないというのが現状である。そこでここではその原因や目的解決策を探り、日本の音楽の歌い方には雅楽系、声明系があるという。このうち現行の教科書は、雅楽系の歌い方に重きが置かれていると思われる。この2つの歌い方の系譜を辿り、教科書には触れられていない、もう一つの日本の音楽の歌い方を、実践を交えて提示している。</p> <p>「国民学校芸能科音楽の研究Ⅱ」の継続研究の口述発表である。当時の子どもたちが、どう音楽の授業を受け止めていたかを、アンケート、聞き取り調査を基に統計をとり発表している。</p> <p>共同発表者：本多佐保美、国府華</p> <p>「国民学校芸能科音楽の研究Ⅲ」の継続研究の口述発表である。アンケート、聞き取り調査の他、保存されている資料の学籍簿や授業記録などを解読し発表している。</p> <p>共同発表者：今川恭子、本多佐保美、西島央、藤井康之、村上康子、<small>睦久祥子、吉山貞子、中田南子</small>、声明、民謡、演歌でみられたコブシが現在の若者の歌の中で、どのようにして使われ変容しているかを探り、音楽教育の歌唱指導に新しい示唆を与えることを目的としている。</p> <p>研究対象に桑田佳祐、平井堅を挙げ継続研究である。前述・研究対象である桑田佳祐・平井堅に加え、ケミストリー・ドリカムを挙げ、Jポップスに見られる装飾的旋律の一考察を述べている。音楽教育の歌唱指導に新たな示唆を与えたものである。継続研究である。本稿では比較しやすい対象曲として、リバイバル曲を取り上げて装飾的旋律を比較分析している。音楽教育の歌唱指導に新たな示唆を与えたものである。</p> <p>共同発表である。日本の伝統的な音楽の鑑賞方法の導入として、子どもの身近な音楽Jポップを取り上げている。そして、そこから伝統音楽、とりわけ今回は、能の謡を例として取り上げ、伝統音楽の鑑賞法へと関連づけている。</p> <p>共同発表者：桐原礼、木暮朋佳、中継続研究発表である。本稿ではカバー曲である坂本冬美の「また君に恋してる」を取り上げ、歌い方の分析を行っている。音楽教育における歌唱教育の在り方に示唆を与える事を目的としている。</p>
--	--	--	---

10. 「伝統的な声の特徴を生かした歌唱学習の試み」		2013年6月	全日本音楽教育研究会全国大会 開催地： 神戸市総合教育センター	日本の伝統的な声の特徴を生かした歌唱学習の新たな試みである。実際に日本民謡を歌う導入段階として、J-POPを活用する可能性について追究している。この試みを通して、音楽科教育において、日本の伝統的な音楽を用いた歌唱学習を、今後より一層促進し、伝統的な声の特徴を生かした歌唱学習に新たな試みとを新学習指導要領では我が国の音楽や郷土の音楽の充実化が示されている。ここでは、音楽科教育における歌唱領域において、郷土の音楽を取り上げたとしても、実際に歌う段階にまで至らないという現状での課題を踏まえ、歌唱活動の前段階としての鑑賞活動の方法や在り方を、具体的事例を上げながら展開し述べて
11. 「装飾的旋律の一考察」		2019年3月	群馬大学教科教育研究会研究集会 開催地：群馬大学	
(演奏会・展覧会等)				
1. CD名 二胡の音色 東方の情調	キングレコード	2000年4月		中国楽器胡弓（胡弓演奏者：羅紅） ピアノ伴奏中里南子 レコードNKCD1366
2. コンサート名 初夏の宵の篝火コンサート	千葉県市原市光福寺	2000年5月	開催地：市原市佐是・光福寺	中国楽器胡弓（胡弓演奏者：羅紅） ピアノ伴奏中里南子
3. コンサート名 MIYAJI millennium concert	アールフー企画	2000年5月	開催地：宮地楽器小金井小ホール	中国楽器胡弓（胡弓演奏者：羅紅） ピアノ伴奏中里南子
4. コンサート名 滝乃川学園記念チャリティコンサート	社会福祉法人滝乃川学園	2000年6月	開催地：くにたち市民芸術ホール	中国楽器胡弓（胡弓演奏者：羅紅） ピアノ伴奏中里南子
5. コンサート名 ソウル オブ タンゴ	栃木県鹿沼市なかじ	2004年10月	開催地：栃木県鹿沼市なかじ	ピアノトリオ （ピアノ中里南子 チェロ佐藤京子 ヴァイオリン駒橋博美）
6. コンサート名 大倉山水曜コンサートVOL. 993 リベルタンゴ ～ピアソラの響き～	横浜市大倉山記念会館	2005年3月	開催地：横浜市大倉山記念会館	ピアノトリオ （ピアノ中里南子 チェロ佐藤京子 ヴァイオリン駒橋博美）
7. コンサート名 Piano Trio響コンサート	東京都港区南青山マンダラ	2007年9月	開催地：東京都港区南青山マンダラ	ピアノトリオ （ピアノ中里南子 チェロ玉川克 ヴァイオリン森山八千穂 作曲廣木良行）
8. コンサート名 VOL. 9 郷愁コンサート	埼玉県浦和市スタジオプラネット	2007年9月	開催地：埼玉県浦和市スタジオプラネット	ピアノトリオ （ピアノ中里南子 チェロ玉川克 ヴァイオリン森山八千穂 作曲廣木良行）
9. コンサート名 大倉山水曜コンサートVOL. 1120 ピアノトリオのタベアディオス・ノニーノ	横浜市大倉山記念会館・NPO法人	2008年2月	開催地：横浜市大倉山記念会館	ピアノトリオ （ピアノ中里南子 チェロ玉川克 ヴァイオリン森山八千穂 作曲廣木良行）
10. コンサート名 ピアノトリオ響 アストロピアソラ	愛知県名古屋市パラダイスカフェ21	2009年7月	開催地：愛知県名古屋市パラダイスカフェ21	ピアノトリオ （ピアノ中里南子 チェロ玉川克 ヴァイオリン森山八千穂 作曲廣木良行）
11. コンサート名 Piano Trio響コンサート	東京都港区南青山マンダラ	2009年8月	開催地：東京都港区南青山マンダラ	ピアノトリオ （ピアノ中里南子 チェロ玉川克 ヴァイオリン森山八千穂 作曲廣木良行）
12. コンサート名 鍵絃夢奏コンサート	KN企画	2011年2月	開催地：愛知県名古屋市広小路ヤマハホール	ピアノ中里南子 チェロ玉川克 ヴァイオリン森山八千穂 箏長谷川慎 箏長谷川愛子 尺八岩田卓也
13. コンサート名 野間っ子キラキラコンサート	美浜町立野間小学校	2011年6月	開催地：美浜町立野間小学校	ピアノ中里南子 ステイールパン松井奈津都子 マリンバ松井奈都子

14. コンサート名 午後のコンサート ～ピアノトリオの響 き～	市貝町立 市貝中学 校	2012年2月	開催地：市貝町町民 ホール	ピアノ中里南子 チェロ玉川克 ヴァイオリン徳永希和子
15. コンサート名 東洋の響・西洋の響	アンダン テ ミュー ジック	2014年9月	開催地：カワイ表参 道 パウゼ	ピアノ中里南子 二胡羅紅 ヴァイ オリン森山八千穂 マリンバ小田も ゆる
(招待講演・基調講演)				
(受賞(学術賞等))				

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等 の別	種 類	採択年度	交付・ 受入元	交付・ 受入額	概 要
(科学研究費採択)						
(競争的研究助成費獲得(科研費除く))						
(共同研究・受託研究受入れ) 1 音楽教育史研究にお ける制度・教師・学 習者の関係性の探求	研究協力者	科学研究 費補助金 基盤研究 (B) (1)	2001～ 2003年度	千葉大学	5,800千円	研究代表者：本多佐保美
(奨学・指定寄付金受入れ)						
(学内課題研究(共同研究))						
(学内課題研究(各個研究))						
(知的財産(特許・実用新案等))						